The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シェイクスピア史劇における ’crown’ の観念
Author(s)	藤田, 実
Citation	Osaka Literary Review. 1962, 1, p. 11-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25762
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シェイクスピア史劇における‘crown’の観念

藤　田　　実

ま え が き

シェイクスピアの史劇（ここでは英国史劇を略して史劇とよぶことにする）は，そのそれぞれの題名が指し示す通り国王をその中心人物として構成されている．劇において登場するこれらの国王は，国家機構の中心であり，国家の最高の権威を体現している．彼らの存在そのものが国家の有機的組織にくりこまれている．しかも彼らはまた魂と肉体を備えた一個の人間にすぎないのである．それ故に，彼らの存在と行動は個人のものであると同時に国家の公的なものでもあって，国王という存在は常にこの二重性を生きなければならないのである．国王というものはこの二重性を統一した存在と考えることができるのであって，史劇の中でしばしばその主題となるのである．その場合，この二重性は矛盾的な相を示すのが通常であって，国王という形式を生きねばならない一人の人間は，この二重性を統一よりもむしろ分裂において感じなければならないのである．そこに史劇特有の悲劇性がある．史劇はその成熟度が増すにつれて，この矛盾はますます意識されて表現されるようになる．この分裂は，国王という存在のそれぞれの人間性を強く表現すると同時に，また，この分裂を国王に課してくる国家の非情な機構を人間の次元において表現しているのでもある．その点において，史劇は悲劇と自らを区別するのである．

King Lear において Fool が王国を無思慮に娘たちに分割した Lear の愚かさを次のように揶揄しているのが見られる．

> When thou clovest thy crown i' th' middle and gav'st away both parts, thou bor'st thine ass on thy back o'er the dirt.
>
> (*Lr*. I. iv. 160–26)

この場合‘crown’は分割される王国の比喩であるが，この王冠を裂くということも，この悲劇においては老いた Lear のおかす誤ちを示す材料以上のものではない．しかし史劇にあっては，‘crown’はしばしば生々しい重さをもった観念として表現されているのであって，それは例えば‘kingdom’の観念などと共に史劇全体を構成する不可欠の要素として劇の中に組みこまれている．また時にはそれらは決して史劇の附属的な要素ではなく，独立した中心的な役割を表現の中で与えられているのが見出される．つまり‘kingdom’も‘crown’も‘king’もそれぞれ同じ次元においてその観念が組みあわされ劇的に表現が展開されてゆくのである．そして史劇において，king の存在が様々に個性的に表現されてゆくにつれて‘crown’の観念も次第に変化し複雑化してゆくのである．史劇は，先に述べた通り，国王を一人の人間として描くと同時に，また国王を通して国家そのものを，その歴史のパースペクティヴを通して表現しようとしているのであって，その国家と国王を統一的に表現する‘crown’の観念が同時に多様に複雑に深化させられていることも当然なことでなければならない．

史劇には，そのように他の様々な史劇特有の諸観念が包含されているのであって，それらの内容を吟味し，計量してゆくことは，史劇をシェイクスピアの他の喜劇及び悲劇あるいはまた所謂ローマ史劇などと独立したジャンルであるかどうかを考える時の一つの手がかりになり，また，史劇自体の内的構造を分析する手がかりともなるであろう．

シェイクスピアの史劇の最も初期に書かれた *Henry VI* 三部作における crown についての言及には，一般的に極めて概念的な表現しか見出せ

ないのであって，crown は，最も単純に最高の国家の権力と富と至福が約束された栄光の冠である以上に何らの特殊な限定は与えられていない．crown は野望の対象として狙われ，強要され，ゆずりわたされ，また奪いとられるものとして扱われるが，‘crown’それ自体は終始固定した概念にとどまり，登場する人物の誰によっても個性化された表現を与えられてはいないのである．それ故にしばしば‘crown’については類似した型の表現を生み易いのであって，たとえばしばしば，‘claim’‘resign’‘entail’‘yield’‘reposses’等の語が‘crown’に結びついて類型的な表現をかたちづくり，各登場人物における‘crown’の把握のしかたも単一な固定的なものであるということができる．史劇的観念としての‘crown’は未だ作者の想像力の中において充分発展させられていないことを示すのである．一つの symbol としての‘crown’は，国王，王権，王位及びその栄光などを内容として意味しているが，*Henry VI* における‘crown’が個性化された表現を与えられていないということは，それらが，未だ，調和的な統一を保っていて，少くとも，鋭く矛盾しあう要素であると意識されていない段階を示すものと云えよう．先に述べた国王の存在的な矛盾，二重性は，未だこの限りでは史劇において主題化されていないと考えられる．‘crown’がこの様な，いわば理念的な調和をもった概念であることを，たとえば Richard 二世は‘My crown I am’（*R2*, IV. i. 191）と表現している．この祝福された統一が破れるということは，史劇においては所謂‘anointed king’が神聖なる質を喪失することと結びついているのであって，その神性の剝奪は史劇において極めて ritual な表現によって示されている．

With mine own tears I wash away my balm,
With mine own hands I give away my crown,
With mine own tongue deny my sarcred state,

With mine own breath release all duteous oaths:

(*R2*, IV. i. 207–10)

中世的な kingship の観念では，王の存在は神において正当化されたものであり，その権威は直接に神に由来するのであって，たとえそれが不正な支配者であっても，王に対する反抗は神の意志に対する公然たる反抗ということになり，したがってまた永劫の罪をうくべき大罪であると考えられていた．Bolingbroke の叛乱に対して Richard は次のように神の加護を信じている．

For every man that Bolingbroke hath pressed
To lift shrewd steel against our golden crown,
God for his Richard hath in heavenly pay
A glorious angel; then, if angels fight,
Weak men must fall, for heaven still guards the right.

(*R2*, III. ii. 58–62)

Henry VI は，今述べたように一般的に‘crown’に関しては単純な観念しか含んでいないのであるが，その第三部で王位を失った Henry が自分の王冠は頭の上にではなく，心の中にあるのだ（*3H6*, III. i. 62）と云っているのが見出される．その王冠は「満足」（‘Content’）とよぶもので，めったに王たちが持つことがないものだ，と彼は云う．Henry は Edward に王冠を奪われるが，それは決して彼に全くの喪失を意味しない．彼は crown を失うことによってかえって新たな価値のものを見出しているのだと考える．同じく deposed king である Richard 二世は Henry と同じような価値のものを，彼の内面において見出すことを考えている．

Our holy lives must win a new world's crown,
Which our profane hours here have thrown down.

(*R2*, V. i. 24–5)

即ち世俗の権力を表現する crown の代りに，内的世界の王冠 'a new world's crown' を見出そうとするわけである．crown のもつ絶対的価値を否定して，国王が更に別個の新しい価値のものを見出すのは，*Henry VI* 第三部において更に次のように見出される．無力な凋落する王たる Henry は，王であるよりは朴訥な田舎の若者になって，羊を飼うことで時を数えるような生活の方がしあわせだと思っている．豪奢な刺繍を施した天蓋の下でねむり家臣の裏切りをおそれているより，羊飼いの新鮮な木蔭の馴れた睡眠の安楽を希う（*3H6*, II. v. 47–55）．この 'homely swain' のもつ安楽な下賤の生活と多難な王侯の生活との対比は，*Henry VI* 第二部において，すすけたあばらやの藁蒲団の上の蠅がうなるのを聞いてねむる生活と贅をつくした貴人の部屋の不眠との比較において反復される（*2H4*, III. i. 9–14）．crown のもっていた絶対的な価値は相対的なものに引き下げられてしまう．Henry も Richard も，crown とそれを身につける人間との乖離を鋭く意識しているのである．

Uneasy lies the head that wears the crown.

(*2H4*, III. i. 31)

と病に臥す Henry は王冠を着ける者の苦しみを表現する．crown や sceptre があっても安眠は得られぬと，再び，卑しい奴隷のもつ安息にみちた眠りとの対比で Henry 五世はその苦悩を語るのが見出される（*H5*, IV. i. 276–301）．彼は空しくも王位という形式の本体を見極めようとする．

O Ceremony, show me but thy worth!

What is thy soul of adoration?
Art thou aught else but place, degree, and form,
Creating awe and fear in other men?

(*H5*, IV. i. 261–4)

このように国王自身によって，国王の地位そのものに対する疑惑が放たれ，その絶対的価値が否定されてくると，'crown' もまた国王の神聖な地位，絶対的な権力，輝かしい栄光，そういったものを統合した象徴的観念から下落してゆく．史劇において，かかる絶対性の観念が成立しえた時代は Richard 二世までであり，彼にあってその土台が崩れた時，彼はかかる 'crown' の祝福すべき時代は単に 'a happy dream' にすぎなかったと云っている(*R2*, V. i. 18). 'crown' は国王の人格と本質的に分離し，その神秘性を剝ぎとられて，彼が宿命的に背負わねばならない一つの職責の象徴にまで堕さしめられるのである．この国王の人格と本質的に一体化することが不可能になったという 'crown' の観念は，史劇において強調した表現を受ける重要な主題である．その劇的表現は，もはや死の床にある Henry 四世が，王冠を枕辺に脱いでおき，世継ぎの Prince Henry がその王冠に目にとめそれを指して 'so troublesome a bedfellow' (*2H4*, IV. v. 22) とつぶやく時に見られる．やがてその王冠をうけつぐ世継ぎの皇太子において，すでに 'crown' の観念はその権力の栄光と至上の地位のもつ至福の幻影を消し去られている．それはすでに調和した内包をもった観念ではなく，冷酷な，非人間的な重みをたたえた歪める観念となっている. Prince Henry はやがて Henry 五世として，典型的な英国王として姿を示そうとするのであるが，彼がひきうけようとする crown はすでにその否定的要素をも含めた観念での crown である．正当の世継ぎとして此の栄光より労苦の量である王冠をひきうけねばならぬことを Prince Henry はよく知っている．

王位は終には Henry 四世にとっては耐えがたい重荷として表現されるものであった．彼にとっては王位と人間性とは全くの矛盾でしかなかった．この二重性は恵まれた統一を見ることはできなかった． Henry はその原因の幾分かを，自分が王位を簒奪したその行為に帰している．それ故に自分の獲得した王冠に正統性が回復されるとき，自分において見られたとかしようのない矛盾が是正されると考える．彼は正当な自分の世継ぎ，Prince Henry に王位をゆずることが，自分の crown のもっている歪みを正しうることになるのだと考える．

> ....what in me was purchased,
> Falls upon thee in a more fairer sort;
>
> (*2H4*, IV. v. 199–200)

正当な王冠の継承の方式に従えば，王冠はもっと正当なものとなって（'in a more fairer sort'）皇太子は冠ることになる．そのことは，もっと人間性と矛盾しない，非難の余地のない安定した結合を crown と Prince Henry との間に与えることになるであろうと考える． 王は彼に次のように云う．

> I myself know well
> How thoublesome it (=the crown) sate upon my head:
> To thee it shall descend with better quiet,
> Better opinion, better confirmation;
>
> (*2H4*, IV. v. 184–7)

Prince Henry にとって父王がもつ crown が否定的要素にみちたものであることは明らかであった．だが，彼はその要素をみとめた上で王位を受けとろうと決意する．

My gracious liege,
You won it, wore it, kept it, gave it me,
Then plain and right must my possession be,
Which (=the crown) I with more than with common pain
'Gainst all the world will rightfully maintain.

(*2H4*, IV. v. 220-4)

しかし，ここには彼の主体的決意の表明と共に，王位継承に伴う ritual の要素が或る variation をもって表現されているのを見ることが出来る．皇太子は Henry の眠っている枕辺の王冠をとりあげてみる．彼は王がすでに永遠の深い眠りに陥ったのだと考えている．

My gracious lord! my father!
This sleep is sound indeed; this is a sleep
That from this golden rigol hath divorced
So many English kings. Thy due from me
Is tears and heavy sorrows of the blood,
Which nature, love, and filial tenderness
Shall (O dear father!) pay thee plenteously:
My due from thee is this imperial crown,
Which, as immediate from thy place and blood,
Derives itself to me....

(*2H4*, IV. v. 34-43)

彼はこう云って王冠を自分の頭に戴せてみるのである．彼は父王の深い眠りの中に，幾多の英国の王をねむらせて来た死の眠りを見る，その眠りによって，王冠は一人の王から次の王へと受けつがれて来た．この眠りを見

ている皇太子の眼は決して個人がもつそれではない．彼の台詞の中にはまぎれもなく一つの様式的な感情が流れている．ここには父と子という極めて familiar な関係の形をとりながら（'mr father!', 'filial tenderness'）王位継承の最も儀式的な部分が表現されている．父王 Henry において見られた正統の世継ぎによる crown の継承の正統化の強調が，ここに立場をかえて表現されていて，先に述べた Richard 二世が廃位される場面と逆のプロセスが，この場面に流れているのを見る．'crown' のもつ神聖な要素が剝奪され否定された後に生れる新たな王位継承の表現がここにあって，ネガティヴな要素を含みつつ crown と皇太子は否定しがたい結合に入り，国王のもつ存在的二重性は揚棄されようとする．此の 'golden rigol' は直接の正当の世継ぎに自らをうつすが，それは一見して real であるが本質的には ritual な要素を通じて表現されているのである．*Henry IV* は史劇においては極めて realism に富んだものとしての特質をもち，神話的要素を払拭した劇であるが，その傾向にも拘らず，またシェとクスピアの才能の一般的傾向にも拘らず realism から ritual へ（E. M. W. Tillyard, *Some Mythical Elements in Eng. Lit.*, p. 58.）と回帰しようとする動きがここに見られるのである．'crown' は史劇においては，あらゆる real な否定をこえて儀式において表現される或る要素と結びつく質をそなえている．

Henry 四世は自らも述懐するごとく力と策謀をつくして王冠を Richard 二世から邪まにも奪った（'God knows, my son, By what by-paths and indirect crook'd ways I met this crown' *2H4*, IV. v. 183–5.）のであるが，このような欲望の行動を敢えてとらせるものとしての王位は 'crown' によって象徴的に表現される．*Henry VI* 第三部で王冠に望みを抱く York にむかって，その野望をかきたてるように次のように語られる．

How sweet a thing it is to wear a crown;

Within whose circuit is Elysium
And all that poets feign of bliss and joy.

(*3H6*, I. ii. 29–31)

このような甘美な夢想よりも，もっと激しい王冠への執念をこの Gloucester, 即ち後の Richard 三世は抱いている．彼は岬に立って遙か遠方にそこを歩んでみたいと思う浜辺を見つけるように，王の座をはるかに見て胸を焦す．そして，その栄光が醜悪な身体をもつ彼には思いも及ばぬ遠い存在である故に，彼の野望は益々熾烈になり（'So do I wish the crown, being so far off', *3H6*, III. ii. 140)，おそろしい殺害を次々に犯させる絶望的な努力へと自らを誘う．彼の心を占める crown のイメージは奇怪な輝きをもっている．

....my mis-shaped trunk that bears this head
Be round impaled with a glorious crown.

(*3H6*, III. ii. 170–1)

しかし王冠が，その黄金の環の中に夢みられたような Elysium を秘めていることは現実にはないのであるとする表現もまた見出されるのであって，王冠が象徴する宮廷は，阿諂追従をこととする者にみちていて，王冠の中は広大な荒野にも等しい（*R2*, II. i. 100–3)，あるいは，王の頭を取巻く虚ろな王冠の中には，死が宮廷をひらいており，そこにいる道化が，王の威勢を嘲笑している(*R2*, III. ii. 160–4)．このように 'crown' は甘美な夢想や鋭い野望の対象であると同時に，はげしいのろいと蔑視の対象でもある．このような対蹠的な表現を可能にし，その二様の表現を統一するものとしての 'crown' は，次にみるように王のもつ忍びがたい心労の表現においてもまた見出せる．先に述べた，王冠を枕辺において，死の床

に臥す Henry 四世に関して，皇太子は，その王冠に向い，

> 'This care on thee depending
> Hath fed upon the body of my father,
> . . . . .
> But thou (=crown), most fine, most honoured, most renowned,
> Hast eat thy bearer up'..... (2H4, IV. v. 158–9, 163–4)

と非難のことばを浴せる．王冠が与えるもっとも輝かしい栄誉と名声，それはまた王の身体を冒してしまうような残酷さを備えている．逃れようのない責務によって，心労で王は命の養いである眠りを奪われ，ついに倒れるというわけである．野望をさそうその恍惚とさせる眩い黄金の光には，そういった残忍な性質がかくされている．魅惑と非情のこの二つ矛盾を備えたこの王冠の黄金を指して，最良の金である汝は最悪の金だ('thou best of gold art worst of gold' *2H4*, IV. v. 160) と皇太子は云う．限りなく人間の欲望を誘うこの金色の豪華な光輝は，同時に庶民の味わうことのない最も苛酷な拷問で王の命を消耗させるずっしりした労苦の重さでもある．史劇に特徴的にえがかれるこの矛盾した観念の象徴的存在についてシェイクスピアは皇太子に 'O polished perturbation! golden care!' と嗟嘆の声をあげさせているのである．Henry 六世, Richard 二世, Henry 四世, Henry 五世がそれぞれに共通したパターンで表現している耐えがたい 'kingly woe' 王冠の重い苦しみも，'crown' がもつある象徴的な力の逆説的表現であると云えよう．